

宮川下流漁業協同組合 紹介

岐阜県北部を流れる宮川は、飛騨高地の中央に位置する標高 1529m の位山を水源とし、上流部の宮村を抜け高山市内、飛騨市古川町、そして河合町、宮川町を流れ下り富山県境で高原川と合流し神通川と名前を変え、富山湾へ注ぐ延長約 120 km の中部の名川である。



【打保ダム】 蛇行する宮川と寄り添う集落。

宮川下流漁業協同組合はこの宮川を中心として、岐阜県北端に位置する飛騨市河合町および宮川町一円をその管轄としている。

上流の飛騨市古川町、高山市は宮川漁業協同組合の管轄となっている。また、下流は共有漁場（高原川、富山、宮川下流漁協の3漁協の共有漁場）のを挟んで、高原川と宮川の合流点からは富山漁業協同組合の管轄となっている。西側と東側は、南西に庄川漁業協同組合（岐阜県の漁業協同組合）北西に婦負漁業協同組合、東は高原川漁業協同組合と漁場を接している。

管内を流れる主だった川は

宮川（みやがわ：地図上では神通川の本流にあたる）

小鳥川（おどりがわ）

稲越川（いなごえがわ）

万波川（まんなみがわ：富山県に入ると久婦須川と名前を変える）

原山本谷（はらやまほんたに：富山県に入ると大長谷川と名前を変える）

の5河川。

その支流として

小鳥川、稲越川に流れ込む谷の主だったもの

ソウツイ谷（そうついでに）

月ヶ瀬谷（つきがせだに）

天生谷川（あもうだにがわ）

上朝河原谷（かみあさがわらだに）

上ヶ島谷（じょうがしまだに）

羽根谷（はねだに）

下朝河原谷（しもあさがわらだに）

真の谷（しんのたに）

牧谷（まきたに）

脇谷（わきだに）

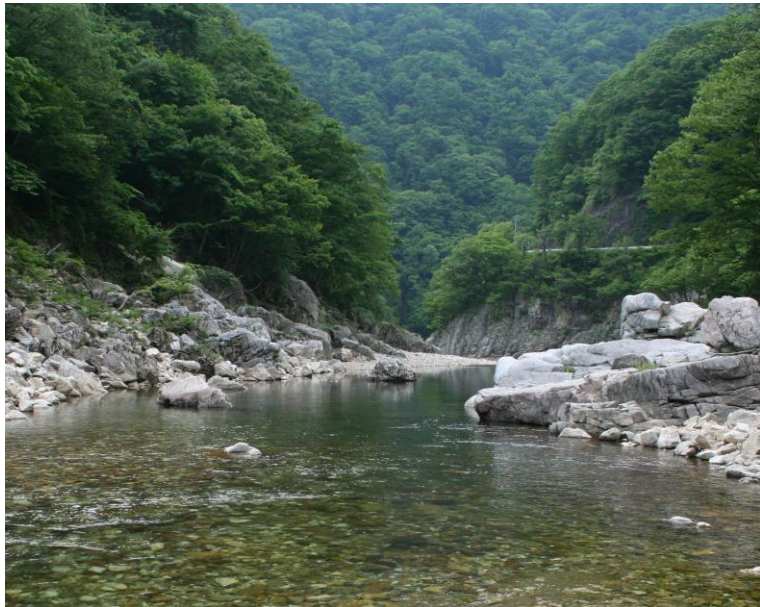
ほか・・・。



【羽根集落】 河合町、宮川町は豪雪地帯。大きな屋根の家屋が多いが積雪対策は万全。

宮川へ流れ込む谷の主だったもの

- 小 谷 (こだに)
- 森安谷 (もりやすだに)
- 高牧谷 (たかまきだに)
- 三合谷 (さんごうだに)
- 菅沼谷 (すがぬまだに)
- 打保谷 (うつぼだに)
- 大 谷 (おおたに)
- 洞 谷 (ほらだに)
- 戸 谷 (とだに)
- 滝 谷 (たきだに)
- 小豆沢谷 (あずきざわだに)
- ほか・・・。



【蛇淵】切り立った崖と国道と淵。淵の最深部は 10m。

から見事な鮎が育つ川である。また、渓流魚も山女魚、岩魚、虹鱒を豊かに育て、その巨体を維持させるだけの懐の深さを持つ。しかし、平成 16 年の大水害では、宮川は全域で多大な被害を被った。それから時間も経ち徐々に回復しているが、まだその爪痕を各所で見る事ができる。

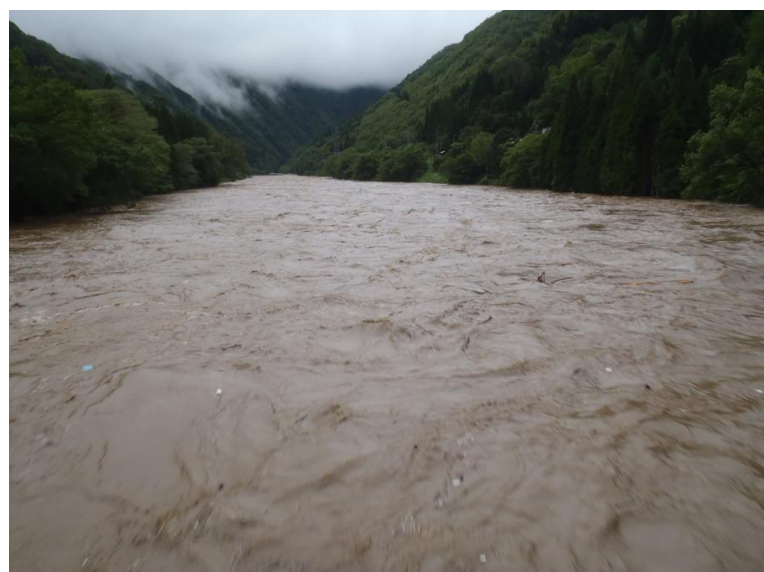
その他、このような宮川の様子は水力発電施設の設置に好適であり、管内だけでも坂上ダム、打保ダム、蟹寺発電所取水堰堤等と、それに関連する多くの発電施設が設置され、宮川の水量は常に制限・制御されている。釣りの記事に「宮川での釣果はダムの放水次第」と書かれることが多々ある所以である。



【坂上ダム】狭隘な渓谷はダム建設に好適。

【宮川】

上流の古川町、高山市では開けた盆地をゆったり流れる宮川であるが、管内の宮川は一変、その大部分は深く切り立った峡谷を流れる。石も大きく“険しい”と表現される様子である。そして奥飛騨の支流の水を集めた水量は豊か。流れは大きく深い淵瀬からなり、育つ魚もその川相のよう。特に鮎について、宮川町では“なたべら”という表現がある。“なた”のように体高があり身が厚いという表現であるが、昔



【平成 26 年の洪水】普段は穏やかや宮川も時には荒れ狂いたくなるのだろうか。

【小鳥川】

高山市清見町を水源とする宮川の大きな支流のひとつ。上流部は宮川漁業協同組合の管轄であり、清見町から河合町舟原に入ったところで当組合の管轄となる。そして当組合の管轄となってすぐに、県下でも有数の巨大ダムである下小鳥ダム（しもおどりだむ）がある。その下流は平成 15 年まで水無区間であったが、現在は維持放流が行われるようになっている。この小鳥川に流れ込む谷川は深い山々を水源に持つものが多く、上流からソウツイ谷、月ヶ瀬谷、天生谷（天生峠は紅葉で有名）、上朝河原谷、上ヶ島谷、羽根谷、下朝河原谷、ニッ屋谷、井谷がある。夏でも水量、水温が低く維持され溪流漁の生息に好適な環境である。全体的に里川の様子であり入川も容易である。



【小鳥川】舟原の甌穴。清冽な水に美味しい鮎が育つ。

これらの川や谷で育った溪流漁や鮎は小ぶりではあるが整った身は締まっていてとても美味しい。鮎の香りも澄んでいると評価される。しかし、平成 11 年と平成 12 年の豪雨災害によって周辺の山林が崩壊し河川も多大な被害を被った、河川状況は徐々に復旧してきているがまだしばらくの時間が必要である。

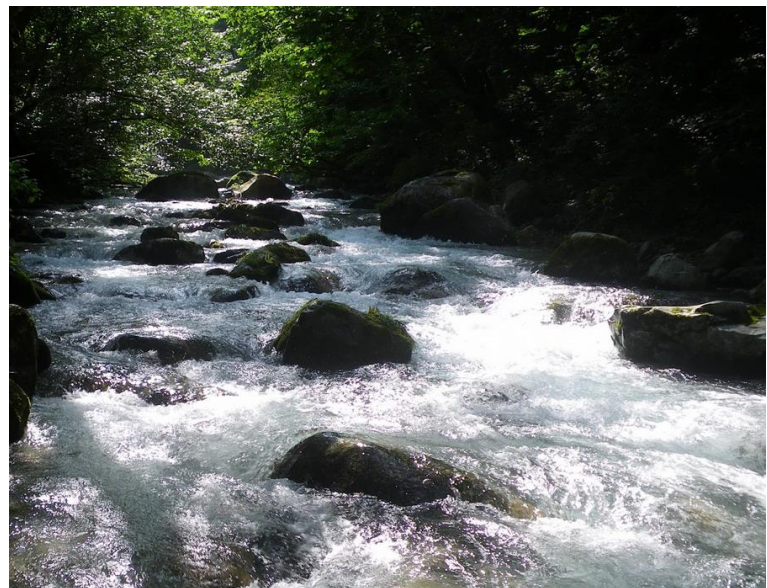


【クマタカ】環境立村・河合村。今は河合町

民家のすぐ近くにクマタカも出没する。

※天生谷と高野聖

とあるスポーツ新聞の記者から「天生谷は泉鏡花の「高野聖」の舞台だよ。」と教えてもらったのはいいが、いまだに目を通す機会がない。冬は雪下、夏なお暗く、深山幽谷の天生谷もそこかしこに堰堤という人工物が見える。作業員たちは何かを感じることができたのだろうか。



【天生谷】源流は夏なお寒い。

【稲越川】

河合町稲越を水源とする小鳥川の支流である。この川は最上流部まで民家が沿川にあり、管内で最も手軽に渓流釣りが楽しめる場所なのではないだろうか。

この川も小鳥川を同様、平成 11 年と平成 12 年の豪雨災害の際に多大な被害を受け、流程の大部分は 2 面護岸となっている。しかし、災害復旧工事の際に作られた堰堤には魚道が整備され、護岸には多自然工法が多用してある。そのおかげで魚の移動や餌生物が確保され、岩魚の魚影はとても濃い。鮎もよく育ち、昔は下流部にはヤナ場もあった。

この川、ところどころに壊れた木組みの堰堤があるのだが岩魚の隠れ家になっているようだ。条件がそろえば大岩魚が顔を出すことがある。梅雨時は岩魚たちの移動の季節。狙うには良い時期かもしれない。

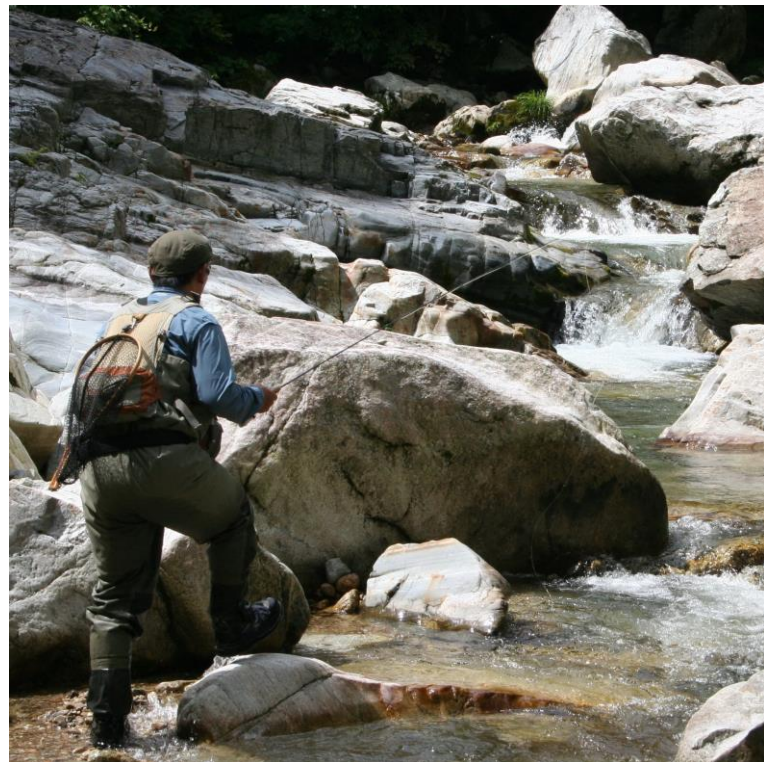
最下流部に関西電力株式会社の角川発電所の取水堰堤がありその下流は水無区間である。このあたりの堰堤に魚道があれば宮川から大きな鱒達が遡上し産卵できるのだが・・・。



【稲越川】北アルプスの山々が見える。

【万波川】

宮川町万波を水源に、宮川と並行して流れ降る神通川水系井田川の支流である。下流は富山市八尾町。富山県に入ると久婦須川と名を変える。この万波川、上流部は広い盆地にあり下流部は両岸が険峻な V 字峡谷である。盆地周辺は明治時代に開拓が始まったというが、現在は一部の農地を残し飛騨牛の牧草地兼放牧地になっている。川は 2 面護岸されている場所が多く、里川といった様子である。一方、下流部はアクセスもままならない秘境の様子である。途中、関西電力株式会社の万波発電所取水堰堤から万波発電所までは取水されているため水無区間となっているが谷水が多く流れ込むため魚の生息には支障はないようだ。地図上には八尾町に至る林道があるようだが、もちろん舗装はなく、土砂崩れで先に進めない状況である。改修の予定はない。上流下流とも流れる水質は良質で岩魚の魚影はすこぶる濃い。護岸された川にも岩魚の姿が絶えることはない。あと、この万波、江戸時代に国境紛争があったとかで文献に載っているが、昔は大変だったようである



【万波川】万波発電所下流の溪相。イワナの魚影はすこぶる濃い。



【原山本谷】源流部。川沿いに国道(酷道)471号線が通る。

【下小鳥ダム】

下小鳥ダムは関西電力株式会社の発電用ロックフィルダムで堤高 119m、総貯水量 1,23,037,000 立方メートル (1 億 2 千 3 百 3 万 7 千である。)。送水先の下小鳥発電所の最大発電量は 142,000kW。建設は昭和 45 年着工の昭和 48 年完成である。このダム、運用当初は現在と比較にならないほどの生物の生産量があったようで、山女魚、岩魚、虹鱒といった鱒類や鯉の漁獲は現在からは想像できない状況であったと聞く。特に鱒類 (特に岩魚) は 1m に迫るサイズのものがあったようで、当時を知る方からは「道具がない。見ていることしかできなかった。」といった話を聞くこともできる。今も、もしかしたらもしかするのかもしれないが・・・。

最近はそのような話はなくなったが 1m 級の鯉の話はしばしば聞くことができる。

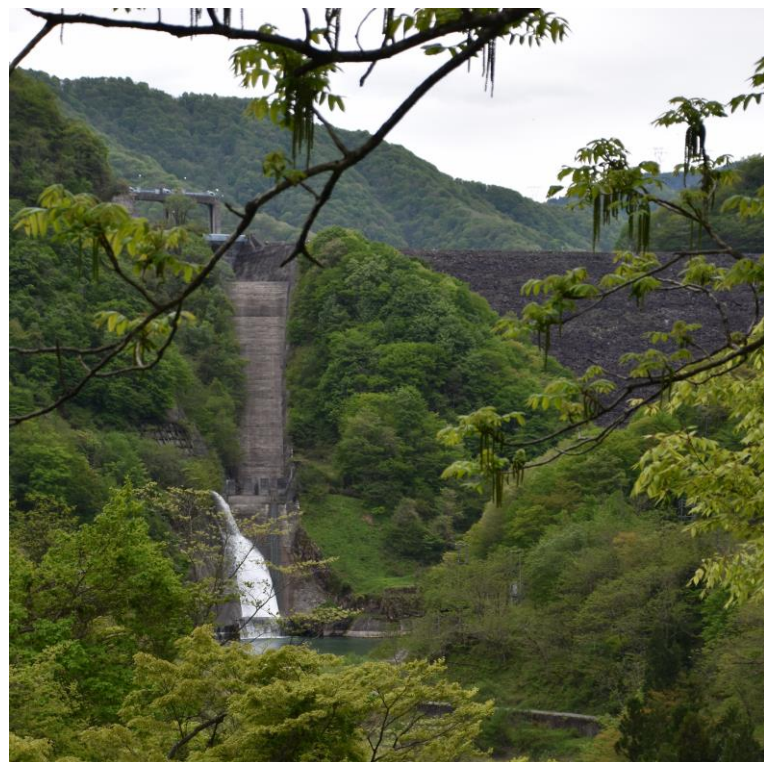
その他、下小鳥ダムの特記事項としてアメリカナマズが挙げられる。本種は平成 17 年に施行された特定外来生物法の特定外来生物に指定されているが、このことにより許可のない生体の移動禁止、飼育禁止等が禁止されることとなった。しかし、本種は下小鳥ダムで繁殖しているらしく、毎年相当数が釣獲されている。その中には 10 kg を超えるものも含まれているが、それ以上のものもいるようなので、実際どのようなサイズがいるのだろう。もともとは食用目的で養

【原山本谷】

河合町ニッ屋を源流とし、万波川と同じく富山市八尾町に流れ下る神通川水系井田川の支流である。下流の富山県に入ると大長谷川と名前を変えるが管内では険峻な V 字峡谷が続く。昔から岩魚の魚影が濃い川である。国道 471 号線が川の横を通っているが、通行止めのことが多い。



【下小鳥ダム】網生簀が浮かぶ巨大ダム。



【下小鳥ダム堰堤】堤高 119m の全景。

殖されていたものであり、当時の梶原拓岐卓県知事からはその美味しさから"飛騨河ふぐ"という名まで頂いている。専門に狙っている釣り人もいるようだが、法律に引っかからないようにしっかりメてから持って帰るようにしていただきたい。また、活メによって味も保障されるのでぜひお勧めする。

【渓流釣り】

奥飛騨は高く深い山々に囲まれるとともに、毎年大量に降る雪のため、その山々の間を流れる川は1年を通して豊富な水量と低い水温が保たれる。また、深い山々は水を豊かにもし、それはそこに生息する生物の生活も豊かにする。もちろんそれは川に住む魚たちにも当てはまり、飛騨の川は渓流漁の楽園であるべきである。

管内の渓流釣りの主な漁場は小鳥川、稲越川、その他数多くある谷川である。小鳥川、稲越川は里川として誰にでも釣りやすい川であるし、その他の谷川は奥に分け入れば慣れた者でも危険な場所が数多くある秘境といえる場所である。様々な趣向の釣り人にも満足していただけるだろう。のんびり里川で楽しむのも良いし、ザックを背負って秘境に幻想を追求するのも良いだろう。とても素晴らしいと思う。



【小鳥川の毛針釣り】カワガラスも毛針が気になるのだろうか。

渓流釣りの釣り人はその食味を目的とするのも多いと思うが、釣りに向かう谷によって水源が異なり水が違ふことは当然だが、そうであればそこに住む渓流魚の味ももちろん変わってくる、「〇〇谷の岩魚が最高だな。」「いやいや〇〇谷の方が旨いだろ。」なんて会話もよくある。いろいろな楽しみ方があるものと思う。私はどちらかという釣った魚はキャッチアンドリリースだが、食べたいときには迷いなく持ち帰る。それが幸せな味であれば言うことはない。



【源流の岩魚】天然岩魚には警戒心と食欲さが同居する。
食欲に敗北した一尾。

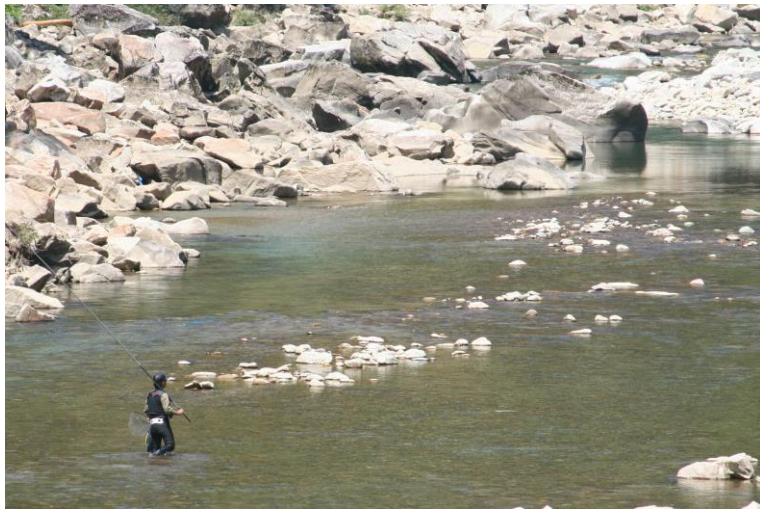
【友釣り】

近年、いろいろな理由で鮎が掛からないといった声を聴く。しかし、今でも元気な鮎がいれば遠くからでも飛んできて罠にぶつかってくる。いろいろな釣り方、仕掛けがあるが“やる気”のある鮎がいれば問題ない。そんな鮎が今年もいることを信じて罠を泳がせるだけ。宮川は川相こそ渓谷といった場所が多いが、飛騨周辺でも水温の上昇が最も早い河川の一つであろう。石垢の付きも大変良く、夏場などは垢ぐされで歩くのに難儀することが多々ある。



【8月の宮川鮎】「なたべら」25 cm 160g はアベレージ。

そのため良い年には解禁直後から 20 cm級が釣れ盛り、さらに 8 月お盆過ぎには 28 cm 250g といった大鮎が掛かり始めることがある。そんな大鮎に何度も河原を引っ張り廻らされるのは重労働である。また、ヤナの棚には尺鮎が乗ることもよくあるので是非狙っていただきたい。



【宮川の鮎釣り】友釣りは“一に場所、二にオトリ”場所選びが最も大切。

鮎の味については地元に住む者の主観であり、そのあたりはご容赦願いたいですが、炭火焼にした鮎は川と山を濃縮したような香りとほくほくの身、適度な油の乗りでとても美味しいと思う。7月の若鮎の香り、8月の“なたべら”の濃縮された旨味、9月の落ち鮎どれをとってもいいでしょう。

宮川の友釣りの季節は短い。雪代が落ち着いた7月(平成29年は6月25日)にやっと解禁したと思ったら、8月お盆を過ぎるともう秋の声が聞こえる。そして8月下旬には夜川網漁が始まりそろそろ竿仕舞い。

網漁は鮎を警戒させるが、十分な漁獲があれば下火にもなる。そして警戒していた鮎もまた釣れるようになる。それから大鮎を狙って通う釣り人もいる。それでも10月は難しい。一桁の気温では寒くて川に入っていられない。



【友釣り】追星が並ぶ宮川鮎。小さくてもマッチョです。

【宮川の本流釣り】

宮川は鮎だけでなく鱒達の元気も良い。山女魚、岩魚、虹鱒を主体として、サイズは川の規模に比例する。谷川ではめったにお目にかかれない40 cmを超えるものも珍しくない。虹鱒に至っては70 cmを超える巨体を手にすることもある。

近年は本流でも鱒類を狙った大勢の釣り人を見かけるようになった。時代の流れであろうか・・・ルアー、フライ、本流釣りといった広い場所を生かしたダイナミックな釣りは見ていて飽きない。ベストシーズンは4~7



【本流の大物】 宮川の大物たちは元気がいい。

月。特に5月以降の鱒たちのファイトは3、4月の低水温期とは比較にならない。友釣りの解禁以降も友釣りができない増水時にはお勧め。さらに餌を十分食べている盛期の鱒たちは脂がのり味も良い。その最上級のものは鮎とも比較して遜色ないと評価される。



【宮川と高山線】 高山線は北陸、東海の交通の要。

宮川周辺地域の生活の要。

※ダムの水無区間

現在、宮川にはダムとダムの間の水無区間が3箇所存在する。宮川町小谷地内(角川ダム堰堤~角川発電所) 宮川町岸奥地内(坂上ダム堰堤~坂上発電所・打保ダム)、宮川町丸山(打保ダム堰堤~三合谷・菅沼谷出会い)である。通常、ダム堰堤からの放水がないので干せてしまっているが、水量の多い雪代や梅雨時期には常に水が流れる状況となる。そこには下流のダムからの遡上した特大が潜むことがある。普通の釣果は望めないと思うのでお勧めしないが、普通の釣りに飽きたらぜひ狙ってみてほしい。



【虹鱒】 頭だけで20 cm以上ある。いるところにはいるのが大物。

【ヤナ漁】

ヤナ漁は産卵のために降る鮎を獲る伝統漁法である。かつて管内には宮川だけではなく小鳥川、稲越川にもヤナ場があった。宮川には大無雁、林、大瀬、打保、杉原の5箇所。小鳥川には月ヶ瀬、羽根、角川の3箇所、稲越川には大谷の1箇所である。現在は最下流部の杉原観光ヤナのヤナ場が残るのみであるが、漁獲が問題なわけではない、今でもヤナ漁の盛期には一晩で何万尾という鮎がヤナの棚に乗る。もちろん、すぐそばの食堂から落ちる鮎を見ながら炭火の子持鮎を楽しむこともできる。富山市から41号線で30分の距離。お客も多い。



【大鮎】 飛騨の夏は短い。9月はもう秋。鮎は黒い。

また、ヤナ漁はその年の稚鮎放流の結果をまとめる上でもその漁獲はとても興味深い。友釣りや夜川網漁が不良でも獲れる時は獲れるのがヤナ漁である。あと、友釣りや夜川網ではお目にかかれない大鮎も棚に乗る。平成20年は全体的に大きく育った年だったが、その時に見た中で最も大きなものは373gというものであった。



【ヤナ漁】 降り鮎は増水とともに……。危険が伴う漁でもある。

その他、ヤナに落ちるのは鮎だけではない、鯉、似鯉、鰻、岩魚、山女魚、うぐいも落ちる。虹鱒は落ちたのを見たことがないがどうなのだろう。鰻や岩魚、山女魚はしばしば驚くようなサイズが棚に乗る。山女魚は毎年状況が変化する魚なので注意して見ているが、たいてい40cmを超えるものが数尾は見られる。宮川のヤナ漁は今後いつまで続けることができるのか？ 後継者が絶対的に不足している。人材とともに技術が埋もれる。そしてヤナを楽しむ人が減る。悪循環であろうか。



【杉原観光ヤナ】 ヤナ漁と食堂の組み合わせ。岐阜県内の主だった河川どこでもあります。

【夜川網漁（火振り刺し網漁）】

管内で最も一般的な網漁である。名前のとおり夜間の漁である。あらかじめ流れの緩い淵や瀬に刺し網を張り、たいまつ等の火の光によって鮎を驚かせ、その網に追い込むという漁法である。地元の組合員が一年で最も楽しみにしているのが夜川網の解禁であろう。解禁日は毎年お祭りといった様子である。



【網に掛かった鮎】 網に掛かった鮎。

【鮎】

言わずと知れた年魚の鮎。例外もあるが、たいてい1年の寿命である。その期間で30cmに迫ろうかという成長を示す。すごい魚である。味も説明はいらぬであろう。

管内では宮川、小鳥川、稲越川に放流されている。主な友釣り場は宮川と小鳥川。管内の鮎はすべて放流種苗である。遡上魚は富山県富山市の北陸電力株式会社の神通第3ダムで止められ



【夜川網漁】 火の灯りに逃げ惑う鮎が網に掛かる。



【鮎】 宮川鮎。

1尾も遡ることはない。

※鮎の陸封

「ダムでも鮎は増えるのではないか？」といった質問をしばしば受けるが、答えとしては“できるダム”と“できないダム”があるということになる。よく知る琵琶湖は巨大なダムと一緒に、現在の管内のダムでは再生産は確認できない。その差を生み出すのはなんなのかということだが、稚鮎にとっての海や琵琶湖と同じ役割を果たせるかどうかということである。例えば餌となるに十分な微生物の存在や稚魚が過ごす冬の水温、さらに広さや深さ、流れの程度も条件だろう。北飛驒のダムには何が足りないのだろうか？岐阜県内でも

恵那の阿木川ダムでは再生産の実例があるが、不可能なダムの方が圧倒的に多いようだ。



【稚鮎の放流】 ダム河川では放流なしでは鮎漁は成立しない。

落差が100mあろうともホースを伸ばし放流する。

【山女魚（桜鱒）・天魚（五月鱒）】

山女魚と天魚は見た目はとてもよく似ているが基本的な生活史が異なるようだ。孵化、降河、回遊、遡上、産卵の生活史の中で、降海の時期は山女魚が1歳の春先であるのに対し天魚は0歳の秋。回遊の期間も山女魚の1年間に対し天魚は半年間程度。そのため1年の寿命の差も生じる。大きさについても特に降海型の桜鱒（山女魚）と皐月鱒（天子）では顕著である。ちなみに関東地方の山女魚は天魚寄りの生活史を持つようなので、生活史から見た種としての区分は天魚なのであろう。しかし、いろいろと調べるに従ってそれらの



【ハエ】“生える”から“ハエ”という文献もある。放流用の稚魚。本流に出て翌年は尺になる。

違いも混沌としてくる。山女魚と天魚をきちんと分けることはできないのではないだろうか。



【山女魚】本流では稚鮎を食べて急速に成長する。

話はずれたが管内でよく釣れるのは河川残留型の山女魚である。天魚は放流しなくなって久しいが、繁殖しているのかしばしば釣れる



【天魚】たまに釣れることがある。

こともある。基本的に両種の寿命は2~3年と短命で、成熟し産卵すると死ぬことが多いようだ。河川残留型は多回産卵とされていることが多いが、生息地域の差を感じる。しかし、春先に産卵後の大山女魚や大天魚が釣れたという話は稀にしか聞かない。

宮川で釣れる40~50cmの山女魚や天魚はたいてい1~3年しか生きていない。そのため山女魚や天魚の状況は単年度の河川状況の変化により激変する。このあたりを考えると釣行することが大山女魚、大天魚への近道となりそうだ。



【早春の宮川】雪代山女魚を狙い激流を攻める。

【岩魚】

鮎や山女魚、天魚と異なり成熟しても死ぬことはあまりないようだ。寿命も6年程度と長い。



【天然岩魚】 溪に特徴的なのが岩魚。宮川には模様のないものが多い。

逆に夏場の高水温は苦手。そのため水の冷たい谷の奥はたいてい本種が優占している。自然繁殖した一部分は宮川に降りてくることもある。



【解禁当初】 3月の川原の積雪は1m以上ある。

こんな時期でも岩魚たちは活発に餌を追う。



【大岩魚】 本流の岩魚は驚くほど大きくなる。マダラカゲロウを食べていたところを狙い撃ちにされてしまった。

管内全域に生息し最もたくさん資源量がある鱒類と思う。大きさも宮川で60cm位に育つ。春先の低水温時でもよく餌を食べ、ルアーを追いかけてくれるとても元気な魚。



【打保谷の天然岩魚】 炭火焼き用。

毎年、稚魚放流も大量に行うが、それにも増して自然繁殖の稚魚もたくさんいるはず。山林の荒廃にはとても弱い一面を持つ。生息域を守ってやらなければならない魚。

【虹鱒】

岩魚と同じく成熟しても死ぬことはない。寿命は6~7年程度。宮川では80cm位になったという話を聞くが、そのサイズはいろいろとすごいのではないだろうか。馴染み深い本種であるが特定外来生物法では産業管理外来種である。日本の溪流ではあまり生態的な地位の主張をしないことが多く、さらに再生産も積極的ではないため問題視されることは少ないのではないだろうか。宮川に住むやんちゃな鱒類の中でも一番のファイターである。針



【虹鱒】太い胴に小さな頭。高成長の個体によくみられる特徴？

掛かりした後のファイトはスピード、トルクどちらも想像を越えるときがある。虹鱒を専門に狙う釣り人もいるほど。宮川、小鳥川、稲越川が主な釣り場。



【虹鱒】どのような生活をするところのような体型になるのか。



【宮川下流部】巨岩の林立する渓谷。巨大鱒を育む。

【ブラウントラウト】

近年、いろいろな河川で物議を醸している鱒類である。宮川でも繁殖しており、そのしたたかさや強靭さを証明している。寿命は8年くらいあるようで長生きである。特定外来生物法でも産業管理外来種として挙げられている。宮川下流漁業協同組合としては駆除という方針であるが、生息域が小鳥川と宮川の全域に広がっている現在、ブラックバスやブルーギ



【雌のブラウントラウト】このサイズになると抱卵数は1万粒を超える

ルの駆除同様、根絶の有効な手段はない。管内では河川環境が良いのか種としての能力なのか 70 cm程度の個体はそれほど珍しくないような状況である。それら大型個体が釣り針に掛かることは少ないが、宮川の淵の深みから、小鳥川の水深 30 cm程度の葦際どこにでもいる。



【ブラウントラウトとイワナの交雑魚】ブラウントラウトが増えるとういったことも自然に起こる。

【鯉】

宮川下流漁業協同組合は岐阜県内でも鯉の放流が盛んな組合と言われる。もともと寿命が長く、さらに生命力、繁殖力も強い魚であり、小鳥川、宮川に広く見られる。止水域や流れの緩い場所を好むため特にダムに多い。



【鯉】管内のどこでも見られる。

下小鳥ダムは規模も大きく 1m 級の鯉の目撃談もある。釣期は春の乗っ込みと秋の荒食いといったところ。夏は夜釣りで狙う。あと、近頃では少ないが雪の降る中、寒鯉を狙う釣り人もいる。寒鯉は冬の味覚である。



【大鯉】どのダムでも 90 cm前後の鯉の姿を見ることができる。最近 1m を超える鯉が釣れた話を聞いた。餌はうぐいとのことだが、鯉釣りの餌選びは難しい。

きれいな水で育った鯉の味は万人が知るところであるが、下小鳥ダムのような山上湖であればなおさらである。また、地元の漁師は鯉とともに似鯉も刺身（洗い）で食べる。これは試してみるととても美味しい。



【夕暮れの打保ダム】夏場であればこれからが鯉の時合い。

【鰻】

宮川下流漁業協同組合では毎年鰻の放流を行っている。ご存じのとおり鰻は川と海とを回遊する魚であり稚魚は海から遡上する。ダムの上流部ではもちろんいなくなる。そのため放流であるが、放流に頼ることがもったいないくらい美味しい鰻に育つ。雑魚の遊漁承認証を購入していただければ釣ることも問題ない。夜釣りが主体であるが夏場が良い時期なので寒いということもない。興味がある方にはぜひ狙ってみていただきたい。市場に出回ることはないと思うが1kg 1万円近い値がつくこともある。

以前ヤナに落ちた鰻は8kgあったというが、鯉でも8kgといえば80cmクラスだが・・・。

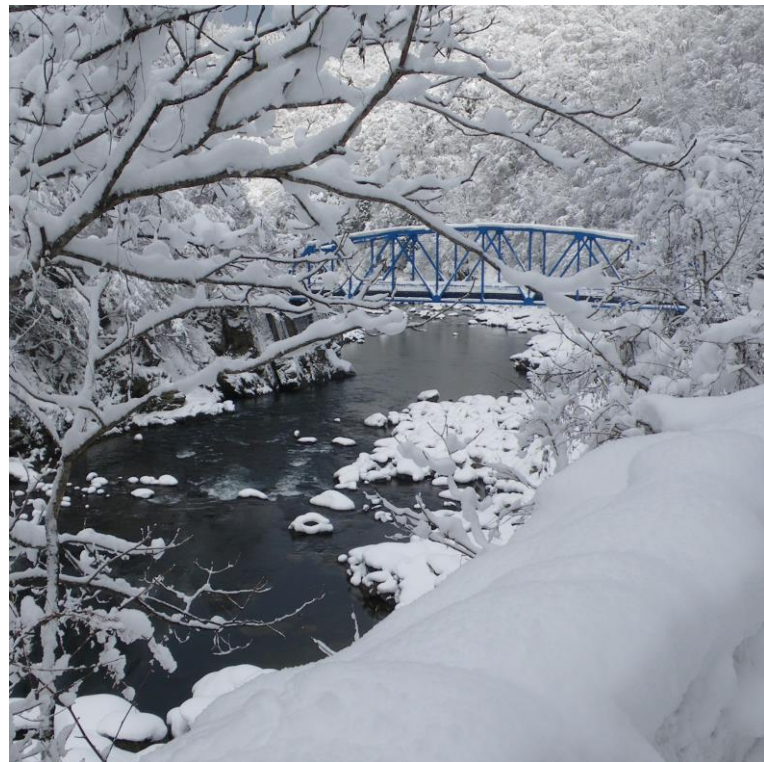
宮川、小鳥川、稲越川どこにでもいるようだが、下小鳥ダムで狙う釣り人が多いように思う。初夏から秋にかけてのんびりと夜釣りのケミホテルを眺めるといった釣りになりそうだ。

【雪】

飛騨の冬は雪が降る。これは当たり前であるが、人はなかなか山に近づくことができなくなる。溪流魚たちは石の下でサビている。産み落とされた卵はこの時期に発眼し孵化をする。孵化した仔魚も春先までお腹の栄養を使って砂利の間でじっとしている。



【ヤナに落ちた鰻】約1m3kg。胴体の真ん中はビール瓶ほどの太さ。



【冬の童子橋】飛騨の冬は雪深く漁は休み。

平成 29 年 8 月作成

〒509-4404

岐阜県飛騨市宮川町巣之内 25 番地 1

宮川下流漁業協同組合

☎05778-63-2139 Fax0577-63-2145